

大阪大学医学部附属病院 神経精神科

住所	大阪府吹田市山田丘 2-15	電話	06 - 6879 - 5111
病床数	52床	病棟数	2病棟

人権センターニュース No.81 より

オンブズマン活動報告

平成 19 年 3 月 19 日訪問

精神科全体

病院側の説明 平成 5 年に今の病棟に移った。52 床。入院患者は開放エリアに 9 名、閉鎖エリアに 22 名。いろいろな薬があるので、通院治療で済む患者が多い。入院予約もないときもある。多い月は毎年傾向的に決まっている。稼働率を言われるが、需要に応じて運用していく。入院患者の層は広く、開放エリアは合併症で他科の治療も必要な患者が多く入院している。閉鎖エリアには認知症の検査入院や、摂食障害で入院する患者などもある。基本的には、3 ヶ月で急性期薬物療法の限界がきて、リハビリプログラムが必要となった場合に、OT がいてプログラムのある病棟へ移っていただく。リハビリになじまない認知症プログラムが必要な患者の退院先は、家族の理解や判断によって様々。

入院ルートは、クリニックからの紹介や通院中の患者の予約入院が多い。救急入院は、飛び下りで骨折している等の身体合併症併発時に救急入院や特殊救急救命処置の窓口からくる。

看護職員の体制は 10 対 1。常勤で手厚い人員配置をとっている。これまで職員はすべて有資格者のみ。この（平成 19 年）春から看護助手が 1 名入り、日中のみ助手 1 名、看護師 2 名が増員となる。

看護師は 5 年を目処に各科をまわる。日本精神科看護技術協会での発表や、年 1 回は外部の研修会に参加するようにしている。人権委員会、倫理委員会等を設け、年 2 回、全ての医局員、看護職の研修を実施。月 1 回、看護部の企画で勉強会を行っている。

病棟について

病院側の説明 閉鎖エリアは個別開放処遇で、「午前 10～12・午後 1～3・午後 5～7、許可のある方は外出できます」と扉に表示してあった。病院建物の外には芝生スペースもあり、散歩を楽しむ患者もいる。病院内にはローソンやスターバックスなどがある。売店の買物や洗濯機も含め、病院全体の入院患者はプリペイドカードを使用する。

質の高いサービスをいかに個々人に応じた内容で提供していくかを検討する企画グループをつくっている。中庭や体育館を使用し、ストレスを発散できるプログラムを企画している。心理職は 1 名で、心理テストなどを行い、必要なプログラムを行っている。看護師がレクリエーションとして企画し、援助して中庭で園芸を行っている。食事や運動療法による 60 分弱の生活習慣の改善プログラムも組んでいる。

退院支援が弱く、再入院や再発する患者が多かったため、SST の準備をし始めた。回復期を 7 つに分けて、どこまでを目標にするか（例：鍵を紛失しないようにしましょう）はっきりとさせている。服薬指導も始めた。1 日、4 日、7 日と自己管理する期間をのばしていく。保健医療福祉がネットワークを組んで協議できるように、全科共通の PSW を配置した。

病棟の様子 訪問した日は 6 割の利用率ということで、全体的にゆったりした雰囲気だった。病室も広々としていて、清潔感があった。開放エリアでは身体合併症のためベッドで過ごす患者が多いようで、廊下やデイルームでは患者に出会わなかった。閉鎖エリアでは機能訓練室やデイルーム、廊下など病棟内でたくさんの患者に出会った。職員の患者への対応は丁寧で研修も行き届いている印象を受けた。

【デイルーム】給茶機（水・湯も出る）自由に氷が使える冷凍庫、流し台、冷蔵庫があった。

【機能訓練室】体育館のようなつくりで高い天井で広かった。2 組がバトミントンをしていた。毎日午後 1 時半から 2 時半まで、看護スタッフ同伴で運動をしている。プロジェクターもあり、音楽療法、レクリエーション

ョン、SST、DVD 上映会、楽器演奏、月 1 回のカラオケ会などに使用しているようだった。

【隔離室】4 室。詰所から離れていた。通路には手前の 2 室と奥の 2 室の間にも施錠された鉄の扉があった。通路には中庭に面して曇りガラスの窓があった。扉には段差があった。窓からの光と、天井の白熱灯をつければ十分な明るさになるのだが、2m 以上もある高い天井まで届く鉄柵には威圧感が感じられた。出入口の幅が狭いため、ベッドは入らない。マット・薄くミシン掛けした敷布団・毛布・上掛け布団が地べたにおいてあった。「身体拘束が必要な場合は、施錠できる個室で行う」との説明。水洗の操作は中からと外からに切り替えられる。室内から水洗ができない場合には、「看護スタッフが 30 分ごとに訪れるので、それで流す」とのこと。

病院側の説明「面会室を通過して隔離室ゾーンへ入るという通路をつくったのは、面談室で説明した上で入って頂くため、急性期あるいは不穏なため話が出来ない場合はもう一方の出入口から入室する」「状態によって開放時間を増やしたり、食事をデイルームでとるようにしている。30 分に 1 回の訪室。基本は、3 個のモニターカメラで見ている、何かおこるとすぐに詰所からとんでくる」。

【病室】個室、2 人部屋（ほとんどの場合は個室として使用）4 人部屋があった。入れていただいた病室からは、大学の棟や庭が見渡せた。ひとりひとりに床頭台と大きなロッカー、ベッドの横には電源があった。各部屋に「緊急呼び出しボタン」があった。病院側によると「あまり鳴らない」とのこと。ナースコールもつけられるが、病院側によると「身体拘束や合併症患者などの自分で訴えにいけない患者の場合以外はつけない」とのこと。閉鎖エリアの病室にはテレビはなく、病院側の説明では、「刺激をなるべく少なくするため」とのこと。閉鎖エリアの男性病室ゾーンと女性病室ゾーンは午後 9 時～午前 7 時は扉が閉められる。

【トイレ】洋式便座。緊急時には職員が外からあけることが可能になっていた。トイレ内に緊急呼び出しボタンがあった。

【電話】詰所から離れたところにあった。開放エリアではデイルーム、閉鎖エリアでは男性ゾーンと女性ゾーンに 1 台ずつ設置されていた。

【浴室】少しだけあいた隙間から見せて頂いた限りでは、カランが 2 個、一般の家庭のものに近い大きさの浴槽、脱衣所の棚は 4 個だった。職員の話では、「女性はひとりで入りたいと希望する人が多いので、その順番を入口のボードに書いてある」とのこと。介助を必要とする患者も週 3 回の入浴。

患者の声（閉鎖エリア）「診察は週 3 回。面会室か病棟で 10 分くらい診察してくれる。十分にみてもらっている」「洗濯機は 1 回 100 円。乾燥機も 100 円だが、1 回では乾かず、200 円分投入しないと乾かないので、お金がかかる」「風呂は週 3 日。男性は人数が少ないし早く入れるのでよいが、女性はいつも順番待ちしている様子」「(病棟の雰囲気) おちついているので、ゆっくりできる」「隔週の月曜日が絵画療法」「音楽療法もある」「個室にいたら、することがなかった。大部屋に移れて嬉しい」「多くの人はテレホンカードも、プリペイドカードも自分で持っている」「担当看護師、主治医は入院のときに紙に書いて教えてくれる」「ケースワーカー、相談員は知らない」「食事の後も、寝る前も、薬はデイルーム決まった場所で看護師が配る」「来た人から順番に看護師が(患者の)手の上に薬を出してくれるからその場で飲む」「ひとによっては看護師が患者の口に入れる」「はじめて入院したときに驚いたことは病棟に入ったら鍵をかけられたこと」「食事でもまずくはないし、個室にいるときはテレビさえあればホテルに近いなあと面会に来た家族と話していた」「食事はおいしい」「食事は選択メニューがある(写真入りメニューが掲示されていた)」「ひとりで外出できない人は、看護師につきそってもらおうか、それもできない人は看護師に買ってきてもらう」「同伴で買物に行けるのは朝の空いた時間、午後 1 時半から 3 時の間。1 対 1 で連れていってくれるときもあるし、4~5 人でまとまっていくときもある」

隔離室について「全然見回りに来てくれなかった。絶対に来るのはおやつと食事の時くらい。半時間とか 1 時間に 1 回というペースではなかったのではないか」「孤独だった。さみしかった」「動物園の檻のようだった」「ここではトイレをする姿が丸見えなのがつらかった」「話をきいてもらおうとしたが医師は『急いでる

んで』とさっさと行ってしまった」「保護室の患者用の風呂を使ったが看護師に『脱いで！脱いで！』とせかされた」「保護室はごはんを地べたに置いて食べる。すごくいやなもの。今は下にシートをひくらしい」「保護室にいるとき、何が嬉しかったかと言うと看護師がきてくれたこと」「トイレトペーパーは保護室の中にあるけれど、うっかり切らしてしまつたらふくものもない。何度も呼んだけども来てくれなかった。『どうしろっちゅうねん！』』と思った」「隣の保護室のところに行く先生に声をかけても担当じゃないからと素通りした」

検討事項

【隔離室について】

構造---大きな鉄柵・むき出しのトイレに人権的配慮を

隔離室のトイレ周りに囲いがなく、トイレを使う姿が職員の通路から丸見えになる。床から天井まで届く高さの鉄柵が設置されている。病院職員から「平成5年当時の基準で設置されたもの」との説明があり、現在では他病院の改装や改築をされた隔離室と比べると問題があるという認識を持っておられ、トイレ周りの囲いの設置や鉄柵を強化ガラスにすることを現在検討しているとのことであった。

運用---孤独感を和らげる配慮を

数人の患者から「1週間たてば少しずつ外に出られるようになったが、入ってしばらくは出ることもできず、時間も日付もわからず、いつまでここにいないといけないのかわからず、もう出られないのではないかと不安になった」「トイレをした後、流すために看護師さんと呼ばないといけないけれど何度も何度も大声を出しても来てくれなかった。くさいし、つらかった」等の声があった。隔離室内から見るとところにカレンダーや時計はなかった。詰所から離れていて孤独感が強くなる隔離室だと感じた。

病院側の説明によると集音マイクがあり、隔離室内の声は詰所で聞こえるということだったのだが、患者が「何度も大声を出しても来てくれなかった」のはどうしてなのだろうか。

トイレ周りのアンモニア臭

便器のまわりはきれいに掃除されていたが、長年の使用でしみついたと思われるアンモニア臭がした。

【カーテンの設置について】

患者から「カーテンがないのがつらい」「カーテンがないから、自分の空間がない」との声があった。(病院側の回答：保護室の環境や病室のベッド周囲のカーテンにつきましても、かねてより改善策を検討しているところであり、できる限り開放処遇の方向で検討しておりますが、1つの病棟に様々な状態の患者様が入院される現状におきまして、危険防止を前提として考慮せざるを得ない部分もあり、難しいところですが、しかし、他病院の状況なども参考にしながら改善していく予定です。)

【合併症治療の提供とネットワークについて】

訪問日の入院患者は31名だった(52床)。病院側によると「措置入院を受け入れたいという気持ちはあるが、最近は減っている」との説明であった。府下では身体合併症をもつ精神障害者が他科での治療を受けにくい現状がある。総合病院としての機能を活かし、より門戸を開いて合併症の治療の必要な患者が入院できるよう、他病院との連携をとっていただきたい。(病院側の回答：身体合併症をもつ患者の受け入れにつきましても、努力しているところですが、全身管理のできる個室が開放に4室、個別開放に4室ありますが、そちらはほぼ常時満室であります。そのため、要請があった時点でのその患者の状態によってはすぐに対応できないこともありますので、病室の改築なども検討しております。)

人権センターが情報公開請求で入手した

H18 大阪府精神保健福祉関係資料より (大阪大医学部附属病院神経精神科分)

43名の入院者のうち気分障害が16名(37%)、統合失調症群が10名(23%)、認知症など症状性を含む器質性精神障害が7名(16%)、入院形態は任意入院30名(70%)、医療保護入院13名(30%)、1年以上(5年以上や10年以上を含む)が3名(7%) (H18.6.30時点)